

(11) 演習について

演習で扱う事例について説明（解説）。ケース情報について共通認識を図った上で、事例検討のワークを行う。

(12) ひきこもり支援の演習～事例検討～

5名程度でひとグループとなり、事例を基に短期支援計画を作成する。

(13) 取組その1（15～20分程度）：個々の支援方法の検討

・ポストイットカードに各自で短期の具体的な支援方法を記載。

・カード1枚に1つの支援を記載（例：「Aさんのカウンセリングを開始する」）。

(14) 取組その2（15～20分程度）：支援内容の分類

支援内容が記載されたポストイットカードを分類して模造紙に貼る。

「本人」、「親」、「関係機関」、「その他」等・・・。

(15) 取組その3（40分程度）：支援方針の協議

分類した支援方法について、グループで協議し、「担当機関（誰が）」「具体的な支援方法（誰が・何を）」を想定。その際、以下の点に留意。

- ・本人の状況を改善するのに効果的か？
- ・支援の内容は具体的か？
- ・支援の実施は可能か？

協議後、その結果を発表する。

(16) 各グループの作業報告と成果物

A班：

- ・適応指導教室の指導員との情報共有

が第1段階。

- ・次のステップとして相手の懐に入っていく（興味のある車、バイク）、同年代の人とのかかわり（過去のアルバイトで対人関係での失敗）。また、母親への支援も同時並行。
- ・本人のニーズにあわせ、職業などについて調べ、サポステと協力しつつ職場見学等を実施、外出を促す。

B班：

- ・目標は社会参加（中間的就労、訓練施設、フリースペースの利用）←サポステのジョブコーチなどの活用。
- ・そのために初期として、公的機関との連携、レポート、家族との関係の調整。
- ・その後初めてアウトリーチに入る。
- ・母親へのカウンセリング、親の会への移行などを通して、共依存を解消。

C班：

- ・適応指導教室との信頼関係を活用→一緒に訪問することも検討。本人の困りごとなどを整理する。
- ・母親に対する支援も必要。面談、仕事等の状況についても把握する。
- ・ストレス要因となっている父親に対する面談なども検討。家族全体をバックアップできる体制。
- ・適応指導教室以外に、居場所、フリースペース、興味（車・バイク）にあわせた資格や学校の情報なども活用。

D班：

- ・相談員が父親のところに出向き話を聞く、併せて姉にも話を聞く（幼少時の様子など）
- ・相談員と指導員と一緒に本人の話聞く（興味のある話、生活リズムを整える、求人情報の提供など）
- ・本人がステップアップするための提案

(学習、通信制高校への再挑戦、趣味のあう仲間を作って話をする) →外出機会として、職場見学など

- ・適応指導教室以外の支援機関とのマッチング (サポステなど)

(17) 演習の振り返り

＜支援計画の作成＞

- ・適応指導教室との連携
- ・家庭外の居場所づくりの提案
「適所」(＝居場所)を探す…足の向かう場所、落ち着く場所
- ・居場所等における本人の役割 (本人の性格を考慮)
- ・就労に向けた支援
- ・両親への支援として家族会の紹介

＜支援の実施＞

- ・居場所への参加からパート就労へ
- ・両親の家族会参加→家庭内での会話が
増える

＜その後＞

- ・居場所→対人関係への自信
- ・就労→正社員としての就労を果たす。
試験に向けた勉強

(18) ひきこもり支援の事例 (その2)

アセスメントをし、状況を改善するための支援計画をどのように立てるか。

(19) 専門職間協働

最近「連携」より「協働」の語を使うことが多くなってきた。

連絡を取り合っ物事を進める(＝連携)

だけでなく、協力して働く (一緒に面談を行うなど)ことが実効的な支援につながる。

(20) 協働実践の進め方

協働を行おうとしても、実践方針や計画・予算、専門職の社会的地位の相違などにより、うまくいかない場合がある。また、非意欲的な場合においても、実質的な協働とはならない。

協働＝協力して活動する上での活発なパートナーシップの状態

(インフォーマルなつながりも重要)

要対協や子ども・若者支援地域協議会など各地の協議会も、年に1回程度の情報共有の会議になってしまう場合は、実効性が薄れてしまう。実務担当者間での協働が重要。

また、チームで支援を行う場合には、それをコーディネートできる人材が必要。どの機関が何をできるか把握できているコーディネーターによる調整が求められる。

(21) 追記

適応指導教室に通級できる生徒は、不登校児童生徒全体の「1割」といわれている。適応指導教室に通級できない9割の不登校児童について、アウトリーチや家族支援、また、本人のニーズとストレングスの視点を持ち、地域の関係機関が連携・チームとなった支援が必要とされ、それらを調整するコーディネーター的存在が重要となる。



講義風景①



講義風景②

9月3日(水)、4日(木)

:「アウトリーチと重層的なネットワークを活用した多面的アプローチ」①②

NPO スチューデント・サポート・フェイス 谷口 仁史 氏

- 概要 -

※事例についてはプライバシー保護の徹底から割愛

(1) 現代社会の中で、若者が抱える問題は複雑化・深刻化している

近年、ニート・ひきこもり、不登校等による諸問題は深刻化しており、一機関・団体の対応では限界がある。

こうした現状を背景に、子ども・若者育成支援推進法等による、関係機関の連携を図る法制度に併せて子ども・若者を支援している。こうした取り組みや、支援手法等を講義したい。

(2) 困難を有する子ども・若者支援において、アウトリーチは不可欠

いじめ、自殺、虐待等については、積極的な対応が求められる。また、従来の通所相談対応や、公的機関の縦割り体制では、深刻な問題を抱えた当事者に対応できない。特に、家庭環境の問題にアプローチするためには、通所相談では限界あり、家庭に介入するためには、専門性を有した機関・団

体によるアウトリーチが求められる。そのためには、専門性を有する支援が必要といえる。

(3) 多重困難事例に対応するためには導入段階の人員体制はチーム対応が原則

従来の支援では対応に限界があると認識し、実態に即した新たな組織、支援体制づくりが重要である。多重した困難に対応するためには、有資格者や多様な社会経験を有する自残によるチーム体制の構築が必要。

また、当事者に最大限配慮した支援方法やプログラムが必要(夕方・夜間のプログラム等)。

※当事者への配慮方法や支援プログラム等について紹介

(4) 医療機関等との連携が必要な支援事例

※事例割愛(事例を通じた解説)

(5) 多重した困難を抱えたケースの支援事例と伴走型支援

※事例割愛（事例を通じた解説）

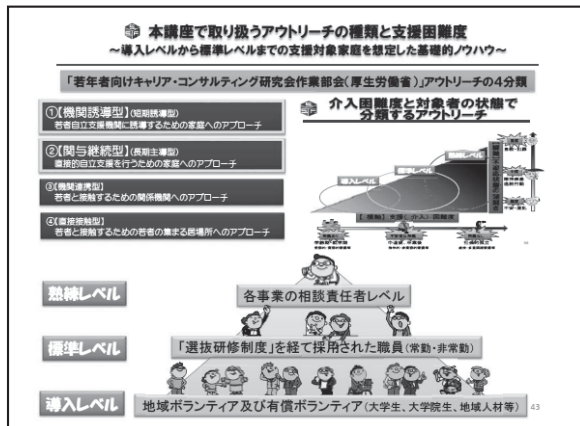
(6) アウトリーチの種類と支援困難度

アウトリーチは、以下4分類にできる。

- ①「機関誘導型」(短期誘導型)
- ②「関与継続型」(長期主導型)
- ③「機関連携型」
- ④「直接接触型」

本講義では、①「機関誘導型」、②「関与継続型」を主として扱う。①、②について特に重要なポイントについては、「関係性」である。

単なる信頼関係だけでなく、支援プロセスの時期によって、意識的に関係性の距離感を調整する必要がある。



(7) アウトリーチと事前情報の収集・分析

①事前情報の収集と分析

事前準備が訪問の成否を決める重要な過程であることを意識する！

【情報の収集と分析】

- ◎一般的な相談情報(現状や経緯、主訴等)
- ◎障害及び精神疾患に係る情報(限界設定)
- ◎家族関係、支援経験やその後の経過
- ◎好き嫌い、得意不得意、興味関心(具体的に)
- ◎回避事項(やっではないけないこと、避けるべきこと等)
- ◎生活実態(起床・就寝時間、習慣、行動等)
- ◎訪問支援に対する同意の有無

この過程で保護者との信頼関係を深めつつ、本人の状態や家庭環境を的確に把握する！

留意点

- 情報を聴き取る過程で専門、疑問に感じられないよう配慮する！
- 複数回に分けて面談することで「見立て」の精度を上げる！
- 支援対象となる若者の考え方や価値観を理解する！
- 導入段階は支援者側の都合ではなく若者の生活実態に合わせる！
- 対立要因など関係性の分析を通じて同じ難は踏まないようにする！
- 同意の取り方はできるだけ具体的なやりとりを押さえる！

(8) 初回訪問に向けた情報の分析・整理を目的とした演習

精神疾患を有する不登校生徒の支援事例から、初回の訪問に伴う留意点等について、2人ひと組にてグループワークを実施。

事前の情報等の整理から、留意事項について再考するとともに、情報収集のポイントを洗い出す。また、演習に関する解説も適宜行い、演習と解説と交えて進めた。

発表：ペア 1

医療機関に通院されていることで、慎重しなければならない。また保護者の意思と本人の状態とで、状態認識のズレが懸念される。

発表：ペア 2

不登校状態になった経緯や、生育歴等について、情報収集をしたい。

発表：ペア 3

保護者と本人の関係性がどういったものかを情報収集したい。家族関係の中で、本人と特に友好的な家族がキーパーソンとなる。初回の訪問支援にて、家族関係を認識した上で対応したい。

発表：ペア 4

想定として、実際の訪問では2名で訪問し、緊張感のないアプローチを実施したい。その他ペア発表。